

# 家畜南瓜ポんキンの 上手な栽培と利用

上野幌育種場

兼子達夫

## ポんキンの収量と飼料価値

秋日を浴びて、オレンジ色に輝く巨大なポんキンは、酪農家の圃場の人気者である。ポんキンは別名ブタカボチャあるいは二〇貫南瓜ともいわれ、一個の大きさは暖地で五〇〜六〇キ、寒冷地で三〇〜四〇キになり、一〇ア当り収量は一〇〜一五トにも達する。葉が枯れてきて、その偉大な巨体が圃場にゴロゴロしている様子は、まさに壯観というほかはない。人間はむしろ庄倒されるが、家畜は大いに食欲をそえられることであろう。

乳牛、豚、鶏いずれも好食し、その生鮮多汁質の中に、ビタミン・カロチン・無機質成分を含んでいる。特にカロチンを一〇〇〜二〇〇倍も含有し、産乳量を増加させ、

且つカロチンは脂質で乳牛体内に蓄積され冬期間の健康に役立つのである。豚、鶏の食欲も増進され、健康を保持し、カロチンは鶏卵を濃黄色にする。

第1表は他作物との成分比較で、赤クロパーには及ばないが、蛋白質、脂肪等ではかぶ、ビート、甘藷より優り、青刈デントコーンと同じくらいである。これらの収量を考え合わせると、ポんキンが栄養生産量の高い作物であることがわかる。

ポんキンの原産地はアフリカの熱帯地方で、元来、生育のためには高温を要し、暖地でも多収が得られるが、強健な作物で九州から北海道まで、どこにでも良く生育し結果する。

栽培は極めて容易で、労力がかからず、労働報酬の高い作物でもある。



ポんキンの最大の欠点は、長期保存がきかないこと、適当な処理方法がないことであり、収穫後一〜二ヵ月間に給与しなければならぬので、余り広面積に栽培しないよう注意することである。

## ポんキンの品種

### マンモスポんキン

(学名ククルビタマクシマ)

果実は普通の洋種南瓜を大きくしたような形で、果皮は桃色、時に緑黒色で光沢があり、肉質は厚く、一個の重さは暖地で五〇〜六〇キ、寒冷地では普通三〇キ程度、大きいものは四五キにもなる。肉厚で果皮が薄いから、家畜の嗜好性は極めて良いが、貯蔵性は乏しい。

第1表 ポんキンと他作物との栄養比較

作物名	一般成分 (%)						全可消化養分	可消化粗蛋白	1FUに要する量	1FU中のDTP
	水分	粗蛋白	粗脂肪	可溶性無窒素	粗繊維	粗灰分				
ポんキン	81.2	1.77	0.44	13.22	1.31	0.61	9.0	1.3	11.5	90
かぶ	90.8	1.20	0.20	5.90	1.10	0.80	7.8	0.9	12.5	50
家畜ビート	89.0	1.10	0.10	7.80	1.10	1.00	7.0	0.9	9.0	45
甘藷	67.2	1.40	0.20	28.80	2.50	0.90	—	—	—	—
青刈デントコーン	80.6	1.70	0.50	10.40	5.60	1.20	16.3	1.2	9.5	40
赤クロパー	81.0	3.40	0.70	8.00	5.20	1.60	13.3	3.2	7.0	145

西洋南瓜と同種で、花粉は交雑しやすく、洋種食用南瓜を栽培する寒冷地では、採種にあたって注意を要する。すなわち受粉を自然にまかせておくと、その後代は両種の雑種が得られ、ポンキンは小型になり、食用南瓜は大型になってくる。

多収を得るためには、日当りのよい肥沃な土壌を必要とし、肥料も多めに施さなければならぬ。

### ラージポンキン

(学名クルビータ・ペポー)

果実は円筒形、枕形で、橙色を呈し、縦に多数の条溝がある。肉質はやや緻密で貯蔵力も相当高いが、家畜の嗜好性は幾分劣る。一個の重量は普通二〇〜二五キ、時に三〇キとなり、一株の結実数はマンモスポンキンより多い。やや早熟で一〇ア当たり収量もマンモスを上回ることが多い。

これは洋種、日本種の食用南瓜と交雑する心配なく、菊座南瓜とのみ交雑する。あまり土地を選ばず、耕作は極めて容易である。

### 栽培上の注意

#### 1 栽培の場所

ポンキンは、播種床(鞍)をつくり、そこへ種子を落すだけでよいから、普通畑へ栽培するほか、日当りのよい傾斜地、雑草の多い圃場、隅の耕作不便な三角畑、土堤、河原等を利用できる。

土壌は砂質壤土が最も適するが、性質強健で土壌を選ばず、各種の土質に栽培でき

る。

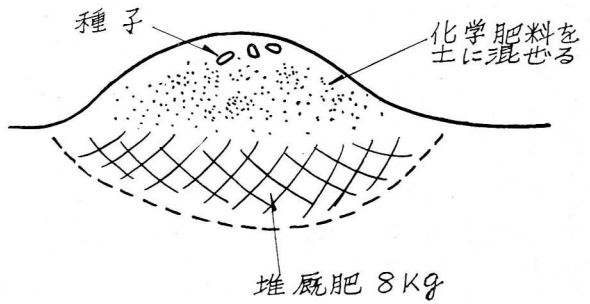
#### 2 播種床(鞍)作り

普通南瓜と同様に播種床を作り、一床に完熟した堆厩肥八キ、過燐酸石灰一〇〇キ、硫酸カリ各五〇キを施す。それに鶏糞、草木灰、下肥など自給肥料を加味すれば、一層よい結果が得られよう(第一図)。

床の間隔は二ア×二アが標準で、ポンキンは食用南瓜より蔓の繁茂が旺盛であるから、株間を充分にとるようにする。あまり狭いのは成績が悪い。集約的な温暖地では二ア×一アとし、株数を多くし、三本蔓仕立に摘芯するか、側芽をかいてやるとかした方が収量が多い。

#### 3 播種と間引

播種期は晩霜の心配がなくなっているから



第1図 ポンキン播種床作り方



ポンキンとかぶの間作

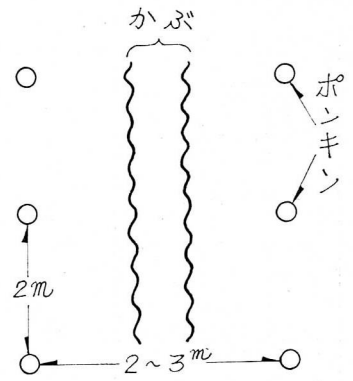
で、寒冷地では五月中・下旬、温暖地では四月中・下旬頃が適期である。これより遅播きは、寒冷地では完熟しないうちに寒くなったり、温暖地では落果が多くなったりして好ましくない。

一床に五〜六粒播種し、一〇ア当たり播種量は〇・五〜〇・七キである。その際ネキリムシ等に幼芽を損われることがあるから、土壌殺虫剤(プタクトール)を使用するとよい。

発芽し、本葉が出たら、三〜四葉のころ間引きをして、一〜二本の良苗を立てる。温床で苗を仕立て移植してもよい。

#### 4 中耕除草と防除

圃場に単作の場合は、蔓がはびこらぬう



第2図 ポンキンとかぶの間作

ちに二〜三回縦横にカルチベーターや耕耘除草をする。  
幼苗の頃、「テナントウムシダマシ」の被害をうけることがあり、特に子葉が被害されると、その後の生育に非常に影響するので、DDT等を散布し防除する。

#### 5 間混作物の利用

温暖地での生育日数は一〇〇日以内で短く、他のいろいろな作物と組合わせて有効に栽培できる。寒冷地では一〇〇日程度を要し、蔓のはびこる迄の空閑地を利用して春播き飼料用かぶを栽培したり(第二図)、早生あるいは生食用の玉蜀黍を間作したりする。

春播きかぶは一般に栽培される例が少ないが、病害(根瘤病)虫害(大根蛆)の被害が少なく、夏播き以上に良質のものが得られ、乳牛、豚のよい多汁質飼料となる。春播き用かぶの品種は「紫丸かぶ」が最良で、いくら早播きしても抽臺の心配はない。四月下旬〜五月上旬、先ずポンキンの播種床の位置をきめ、その畦間にかぶを二畦ほど播種し、適期に間引を行なう。その後ポ

第2表 ポンキンとかぶの間作

(昭32)

作物	播種	収穫	根重	葉重	総重
紫丸かぶ	4.25	7.11	1,685	1,167	2,852
		8.20	1,327	668	
マンモス・ポンキン	5.26	10.20	—	—	9,278

備考 1) ポンキンの栽植間隔 2m×3m (2本立)。  
2) かぶは3mの畦間に、畦幅50cmで3畦栽培した。

と、ポンキン  
つたりする  
長期間にわた  
密播したり、  
蜀黍をあまり  
るが、ただ玉  
しい配合であ  
上非常に好ま  
て、土地利用  
は空間に伸び  
長し、玉蜀黍  
は平面的に生  
合、ポンキン  
黍間作の場  
ンキンと玉蜀  
次に、ポ  
ならない。

業の面から二  
畦が適当であ  
り、またかぶ  
の収穫はポン  
キンの蔓の伸  
長を妨げぬう  
ちに、早目に  
終らなければ  
ならない。

が日蔭となり生育を阻害されるので、注意  
を要し、早生品種を四〜五畝間隔に栽培す  
るのが適当である。

6 花粉の人工媒助  
花粉は早朝から蜂によって媒介される  
が、その頃天候が悪いと蜂の飛来が少ない  
ので、結果を多くするため、特に開花初期  
頃に毎朝人手で授粉してやると効果的であ  
る。

7 開花後の成熟日数  
受粉のち、温暖地では一ヵ月内外(八  
月上・中旬)、寒冷地では五〇日内外(八  
上・中旬)で成熟する。成熟すると葉が枯  
れはじめ、果実は色つき光沢をましてくる。  
貯蔵性は完全したものが多いが、しかし未  
熟のうちからも収穫し、給飼して差支えな  
い。

利用と貯蔵性

乳牛、豚、鶏などいずれも非常に好んで  
食い、いくらでも喰べる。  
与え過ぎて害はないが、乳牛ではやや軟  
便となる。

乳牛一日一頭当り、二五〜三〇キが適量  
で、これに良質の乾牧草を併用するのがよ  
い。ポンキンは主に澱粉質の飼料であるか  
ら、マメ科混入割合の多い乾牧草が好適で  
あり、また蛋白成分の高い濃厚飼料を組合  
わせて給与すれば泌乳量を増加できる。

温暖地では八月上旬から、寒冷地では九  
月上旬から食わせはじめ、先ずマンモスを、  
次にラージを逐次給与して行く。  
ポンキンの貯蔵あるいは処理調製につい

で、多くの人達が実験を試みているが、適  
当な方法は見つからず、結局、生体のまま  
痛めないように収穫し保存しておく以外に  
ないようである。サイレージに調製しても  
水分が過ぎてベタつき、また薄く切っても  
しても中々良い結果は得られない。  
したがって、収穫は晴天の日に、完全し  
たものを選び、「ヘタ」を手頃に切り取っ  
て、果皮に傷をつけないように丁寧に取り  
扱い貯蔵場所へ運搬する。「ヘタ」を果実  
の付根から折ったり、果皮を傷つけたりし  
たものは腐りやすいので、別にして早目に  
給与すること。未熟なものも同様に貯蔵性  
は低い。また、霜にあって果皮が変色した  
ものも勿論よくない。凍結には極めて弱



く、ちょっとした暖気に合っても直ぐ腐敗し  
てくるから、降霜前に収穫を終ること。  
貯蔵場所は、やや通風のきく冷暗で乾き  
目のところが最良であり、一〜五度(C)  
に保たれるのが理想的である。寒冷地では、  
地下貯蔵庫に収納するのが一番長もち  
している。この場合、直接地面にポンキン  
をおくと、そこから腐りが出るから、下に  
土台を置き地面より二〇センチの高さに板を敷  
き、その上にあまり積み重ねないように貯  
蔵する。  
このように注意深く取扱えば、十二月ま  
で給与しつづけることができ、夏期の飼料  
から冬期の飼料へ移る途中のツナギ飼料と  
して、その含有するカロチンなど栄養分を  
冬の準備として役立たせることができるわ  
けである。

(飼料作物育種係長)

